

京都芸術センター制作支援事業

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第29回定期演奏会

2011年6月5日(日) 午後2時開演 (1:15～ ロビーコンサート)

京都府長岡京記念文化会館

## ♪曲目♪

ベートーベン (1770-1827) / 交響曲第6番『田園』

Ludwig van Beethoven / Sinfonie Nr. 6 F-Dur op. 68 (PASTORAL-SINFONIE)

I. Angenehme, heitere Empfindungen, welche bei der Ankunft auf dem Lande im Menschen erwachen.

Allegro ma non troppo

II. Szene am Bach. Andante molto moto

III. Lustiges Zusammensein der Landleute. Allegro

IV. Donner. Sturm. Allegro

V. Hirtengesang. Wohltätige, mit Dank an die Gottheit verbundene Gefühle nach dem Sturm. Allegretto

## —休憩—

チャイコフスキー (1840-1893) / 交響曲第3番

Пётр Ильич Чайковский / Симфония № 3

I. Introduzione e allegro. Moderato assai (Tempo di marcia funebre)-Allegro brillante

II. Alla tedesca. Allegro moderato e semplice

III. Andante. Andante elegiaco

IV. Scherzo. Allegro vivo

V. Finale. Allegro con fuoco (Tempo di polacca)

指揮：柴 愛

## お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。



## 指揮 柴愛 (しば あい)

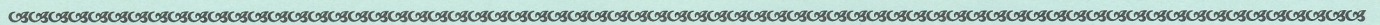
同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏バイオリン専攻 卒業。バイオリンを梅原ひまり氏に師事。京都国際音楽学生フェスティバルにバイオリン奏者として参加する。在学中より、ザ・カレッジオペラハウス、関西二期会、関西歌劇団などで、飯守泰次郎氏、大勝秀也氏、牧村邦彦氏らのアシスタントを務める。

2006年には、イタリア プッチーニフェスティバル、堺シテリオペライタリア公演において副指揮者として公演に同行する。

2010年より、神戸市民文化振興財団「アドベンチャー事業」レインボーハウス支援チャリティーオペラにおいて、モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」、ドニゼッティ「ドン パスグアーレ」を指揮し、今年度は、ドニゼッティ「愛の妙薬」を予定するなど、指揮者としての活動の場を広げている。

2010年ウィーン国際音楽ゼミナールにおいて Andres Orozco-Estrada 氏に師事、ディプロムを取得。

これまでに、指揮を高階正光氏、Klaus Hoevermann 氏らに師事。



## ロビーコンサート

### ブルックナー／4つの『タントウム・エルゴ』

Tp. 遠藤、竹内 Hr. 草木 Pos. 宮下、馬瀬、藤井 Tub. 佐藤

…前回定期演奏会で大好評を博したブルックナーの作品から、交響曲とともにブルックナーの創作の柱であった宗教的声楽作品を、金管合奏に編曲してお送りします。同じ「タントウム・エルゴ」(かくも偉大な秘蹟を伏して拝みます)の歌詞に作曲した4つの音楽を、組曲風にまとめたものです。どの曲も静謐な流れと清澄な響きが魅力的です。(遠藤)

### ファルカシュ／17世紀の5つのハンガリー古典舞曲 より 小序曲・ラポカッシュ舞曲・舞踏歌・跳躍の踊り

F1. 江藤 Ob. 栗山 Kl. 南井 Fg. 石塚 Hr. 黒田

…ハンガリーの民族舞曲の収集に情熱を注いだ作曲家の一人、ファルカシュ。本日は、17世紀に流行した民族舞曲を主題にもつ5つの小品から4曲をお届けします。

17世紀のハンガリーへ思いを馳せながら・・・(江藤)

### メンデルスゾーン／弦楽八重奏曲 変ホ長調 より 第4楽章

Vn. 芦原、村中、山口、西谷 Va. 塩井、河井 Vc. 多田、西山

…前回に引き続きこの曲に挑戦します。いかに早く弾きこなすか、よりも、集中力を保って細かな音をつなげていくかを目標に取り組みました。各パートに散りばめられたフレーズが、まるで一人が弾いているように聴こえるような演奏を目指します！耳だけでなく眼でも楽しんで頂けると幸いです。(芦原)

### ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社 (JTB・日本旅行 etc) 国内・海外  
パンフレット取扱い可能！！  
他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も  
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

### 印刷のことなら

## 大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

# 曲目解説

Tp. 遠藤 啓輔

## ベートーベン／交響曲第6番へ長調『田園』

ベートーベンの人気曲『田園交響曲』は、やはり人気作の第5交響曲と並行して作曲された作品であり、両者はコインの表と裏のような関係にある。作曲家は、湧き上がる多様な楽想を残らず書き留めるために性格が正反対な曲を並行して作曲することがあるそうだが、『田園交響曲』と第5交響曲もそのような関係にあるのだろう。その一方で、作曲技法には共通点が指摘できる。たとえば、冒頭（譜例1）である。第5交響曲の冒頭が休符である（譜例2・矢印部分）ことは有名な話だが、『田園交響曲』の主旋律も休符で始まる（譜例1・矢印部分）。途中で出てくるオーボエの旋律（譜例3）のように、冒頭に音符を書き入れてあっても音楽は問題なく成立する。むしろ冒頭に音符があった方が演奏者としては遥かに出だしを合わせやすい。しかし、敢えて休符にしてしまったことで、演奏者たちが呼吸を合わせて歌いだすことになり、結果、自発的な推進力をもった音楽の流れが生まれるのである。ベートーベンの音楽がさらに凄いのは、こうして生み出された推進力を直後（4小節目）のフェルマータですぐに静止させてしてしまう点だ。そして、このフェルマータで一呼吸おいた後、すぐにまた休符から始まる旋律が生き生きと流れだす。このようにして冒頭わずか数小節の間に、緩急の大きい音楽の流れが提示され、この交響曲が生命の巨大なうねりを描いた作品であることを宣言しているのである。

Violini I  
Violini II  
Viole  
Violoncelli

譜例1 『田園』冒頭

Allegro con brio

譜例2 ベートーベン5番・冒頭

Ob.

譜例3 『田園』第1楽章（部分）

また、楽章構成の面でも、『田園交響曲』と第5交響曲は、一部の楽章を繋げた交響曲という点で、ベートーベンの交響曲の中でも特異な作品である。第5交響曲の、一連につながれたスケルツォ楽章から終楽章への劇的な変化は、この曲最大の見せ場であるが、『田園交響曲』でも、第3楽章から第5楽章（終楽章）までがつながれ、一連のストーリーを形作っている。

さらにオーケストレイションに注目すれば、当時としては交響曲に使用されることが異例だったピッコロやトロンボーンといった楽器が投入されているのも『田園交響曲』と第5交響曲の特徴だ。特に重要なのはトロンボーンである。トロンボーンという楽器はその荘重な音色から、神や自然あるいは悪魔など人智を超えた存在を象徴する楽器としての性格を持っており、かつてはオーケストラで使用される場合も、宗教作品や、オペラにおいて神が降臨する場面での使用に限られていた。ベートーベンが世俗音楽である交響曲にトロンボーンを投入したのは実に画期的なことなのだ。ベートーベンがトロンボーンを用いた交響曲は5番・6番と9番のみであるが、いずれもトロンボーンを神聖な楽器として印象的に活用している。

**第1楽章**は、前述のように、幾度もブレーキがかけられながらも大きな推進力を持って音楽が奔流するという振幅の大きな音楽だが、『田園に着いて覚える快い印象の目覚め』と題されたとおり、全体としては快活な躍動感と明朗な響きが支配する。トランペットや打楽器を用いない簡潔なオーケストレイションによって自然のやさしい光を見事に描き出す。

**第2楽章**は、8分の3拍子が4つセットになって1小節を構成する8分の12拍子で書かれている。このため、3拍子という舞曲風の躍動感と、4拍子的な安定感が同居したような、不思議な感覚を聴衆に与える。『小川の

ほとりの情景』と題されているが、時に速く時にゆったりと流れる川の多様な姿をこの拍子で表現しているのだろうか。前楽章同様、楽器編成は簡潔だが、チェロが旋律担当と伴奏担当の2パートに分けられ、弦楽器がより豊かに響くように工夫されている。楽章の最後では木管が鳥の声を模倣する。楽譜には「小夜啼き鳥」（夕方や明け方に啼く鳥だそうだ）、「うずら」、「かっこう」と各々の鳥名が記載されている。ところで、難聴に苦しんでいたベートーベン作曲当時、鳥の声を聞くことができたのだろうか。ひょっとすると、ここに書き込まれた鳥の声は遠い昔の記憶の回想なのかもしれない。

**第3楽章**は、ベートーベン得意の「主部－中間部－主部－中間部－主部」という5部形式からなる舞曲風の楽章。舞曲と言っても、ハイドンやモーツァルトが交響曲に導入した典雅なメヌエットとは異なり、より土俗的で力強い舞曲であり、『農民たちの陽気な集い』と題されている。収穫祭における飲めや踊れやの大騒ぎ、といったところか。中間部ではこの曲で初めて加わるトランペットが輝きを添える。最後は主部の踊りのステップが急激に速くなり狂乱が最高潮に達する、と思ったのも束の間、地鳴りのような低弦のトレモロの上でヴァイオリンの断片的な動機が飛び交う不気味な音楽に急変したときには、すでに**第4楽章『雷、嵐』**に入っている。文字通り「嵐の前の静けさ」と言うべき不穏な予感が的中し、オーケストラのトゥッティによる大音響が突然襲い掛かってくる。吹きすさぶように激しくなる弦楽器（チェロとコントラバスは5連譜と4連譜が激しくぶつかり合う！ **譜例4**）、管楽器とティンパニの轟音、稲光のように切り込んでくるトランペットとピッコロ（ティンパニとピッコロはこの楽章にだけ投入されている）、そしてしまいにはトロンボーンも加わった音塊が、まるで神が鉄槌を振り下ろすように打ち込まれる。見事なまでに破天荒な嵐の表現だが、楽節構造を見ると、実は4小節単位で粛々と進行する極めて折り目正しい音楽である。情景描写と古典的様式美とが奇跡的なまでに両立された傑作である。この作品が出現して以降、作曲家は嵐を音楽で描くことをほとんど諦めてしまったようだ。リヒャルト・シュトラウスは『アルプス交響曲』の嵐の場面で風音機・雷音機という特殊楽器（装置？）を投入し、グローフェの交響組曲『グランド・キャニオン』に至っては、それに加えて照明効果で稲光を表現させている。近代の作曲家たちがこうしたこけおどし的手法で嵐を描かざるを得なくなったのも、ベートーベンが描いた嵐の音楽を超えることがほとんど不可能だからだ。嵐の猛威が遠くに去ると、柔らかい光のような木管楽器の響きに包まれて**第5楽章**を迎える。『牧歌－嵐の後の喜びと感謝の祈り』と題されたとおり、神への感謝の祈りがこの楽章の主題である。ここでは、ほかの楽器の音が消えても神を象徴する楽器であるトロンボーンの高らかな響きだけが消えずに残るといふ凝ったオーケストレーション（**譜例5・矢印部分**）が随所になされている。これについてトロンボーン奏者の佐伯茂樹氏は、「背後に後光が射す神の姿」を表現したのではないかと推定している。最後は弱音器を付けたホルンが楽章冒頭の旋律を再現する。弱音器をつけた金管楽器の音は、どこか遠くから聞こえてくるようで、イメージされる風景が格段に広がる。しかし前述の佐伯氏によれば、もともと金管楽器の弱音器は、夜襲をかける際の軍隊ラッパや葬列の楽隊が使っていたのだという。この『田園交響曲』の弱音器にもそのような「夜」や「死」のイメージが投影されているのであれば、この交響曲は夜を迎えて一日を終えるところで閉じられ、さらに、夜の世界のその先にある彼岸の世界にまで思いを馳せていたのかもしれない。

※各楽章表題の日本語訳は角川文庫『ベートーヴェンの交響曲』（ベルリオーズ著、橘西路訳編）などを参照した。

（参考文献）佐伯茂樹『名曲の「常識」「非常識」 オーケストラの中の管楽器考現学』音楽之友社

Vc. *ff*

B. *ff*

譜例4 『田園』第4楽章（部分）

Cln. (Do) II *f*

Trb. II *ff*

トロンボーン *ff*

Viol. *f*

譜例5 『田園』第5楽章（部分）

## チャイコフスキー／交響曲第3番ニ長調（作品29）

チャイコフスキーの交響曲の受容のされ方は非常に奇異な印象を受ける。後期の4・5・6番が頻繁に演奏されるのに対し、前期の1・2・3番はほとんど無視されているのだ。チャイコフスキーの全交響曲演奏会といった催しでもない限り前期の交響曲が取り上げられる機会はほとんどなく、僕自身チャイコフスキーの1・2・3番とマンフレッド交響曲（それに補筆完成版の第7交響曲）はそれぞれ1回ずつしかライブで聴いたことがない（4・5・6番はカウント不能ほど数多く聴いているのにもかかわらず）。第6番『悲愴』は別格的な傑作としても、4番・5番に比べて前期の交響曲が極端に劣っているとも思われないので、楽壇のあり様は実に不可解だ。本日演奏する第3交響曲は、中でも特に人気のない作品のようだ。理由は、多様な音楽を盛り込みすぎていてまとまりに欠ける、ということらしい。確かに、楽章が5つもあるうえに、各楽章とも音楽の雰囲気が目まぐるしく変転する忙しい曲であることは事実だ。しかし、全曲を貫き通す動機に着目して聴いてみると、多様な楽想が一つに見事にまとめられた曲として聴くことができるのではないだろうか。冒頭の動機に聴かれる3音からなる上昇音型 a（譜例6）、あるいはその音型からリズムを省略した上昇音型 b（譜例7）が、第1楽章の序奏部分で執拗に繰り返されるが、それらの音型あるいはその変化形（a'、b'）が各楽章の主要主題や聴かせどころ（泣かせどころ）に印象的に盛り込まれ（譜例8～12）、全曲を綿密に結び付けているように思われるのだ。



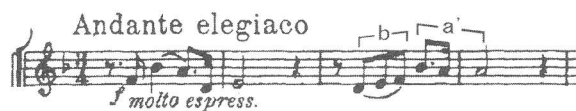
譜例6 第1楽章・冒頭



譜例9 第2楽章（部分）



譜例7 第1楽章・序奏（部分）



譜例10 第3楽章・冒頭



譜例11 第4楽章・中間部（部分）



譜例8 第1楽章・第1主題



譜例12 第5楽章・第2主題

また、全5楽章というチャイコフスキーの交響曲としては例外的な楽章構成も、彼の苦心のたまものだろう。通常の4楽章構成よりも楽章が多くなっているのは、スケルツォ相当の楽章が2つあるからだ（第2楽章と第4楽章）。4楽章構成をとる古典的交響曲の第3楽章はメヌエットなど舞曲風の楽章が置かれた。2つの主題が繰り返されながら微妙に変化していくソナタ形式を基調とした、格調高いがやや小難しい交響曲という形式の中にあって、舞曲風の楽章は「起承転結」の「転」の役割を担い、聴衆が気分転換する意味でも重要な楽章だ。そしてこの舞曲風の楽章は、ベートーベン以降、悪魔的な破壊力をも兼ね備えたスケルツォ（諧謔的な曲）となった。ベートーベンやブルックナーといったシンフォニストたちは、舞曲的な躍動感と粗暴でさえあるエネルギーの炸裂を絶妙なバランスで昇華したスケルツォの作曲を得意とした。しかし私見では、チャイコフスキーはスケルツ

オの作曲を苦手としていたように思われる（同様にスケルツォを苦手とするシンフォニストとしてブラームスが挙げられよう）。たまたま魅力的な第1楽章を誇るチャイコフスキーの第2交響曲がほとんど演奏されない最大の理由は、スケルツォ楽章の出来がいま一つであることに尽きよう。チャイコフスキー自身もそうした自分の問題点を認識していたようで、彼の後期の交響曲を見るとスケルツォをいかに克服するかという努力が推し量られて興味深い。第4交響曲ではスケルツォをピッツィカート・オスティナートという鮮烈な技法で作曲して意表をつき、第5交響曲ではスケルツォの作曲をやめてワルツを第3楽章に置いている。そして第6番『悲愴』では、スケルツォの舞曲的な側面を第2楽章で、破壊的な側面を第3楽章で表現する、というように、スケルツォの性格を2つの楽章に分散している。交響曲第3番はこの『悲愴』の先駆形態をなすものと言え、第2楽章は典雅な舞曲的性格を、第4楽章は悪魔的な破壊力を前面に出している。

**第1楽章：**「葬送行進曲のテンポで」と指定された重々しい序奏で始まるが（譜例6）、徐々に躍動感を増していき、輝かしい主部（譜例8）へと劇的に変化する。愁いを帯びた第2主題、推進力溢れる展開部、というように音楽が多彩に変化し、最後は疾走するようにして終る。

**第2楽章：**前述のように舞曲風の性格が強い楽章で、「アラ・テデスカ（3拍子のドイツ舞曲風に）」と題されている。弦楽器による伴奏の上を木管がやや悲しげな表情で踊るが、時折憧れに満ちた弦の歌が聞かれる（譜例9）。中間部ではせわしない動きが切迫感を出す。

**第3楽章：**アンダンテの遅い楽章で、全編に悲しみが漂う哀歌（エレジー）である。フルートによる荒涼とした雰囲気をもたせた第1主題（譜例10）に続いて、ファゴットとホルンのソロがどこかうつろな表情を漂わせた旋律を歌う。第2主題は、悲しげな表情はそのままに、ほんのわずかだけ希望の光を感じさせる。チャイコフスキーの真骨頂と言うべき音楽だろう。

**第4楽章：**幻惑されるような前楽章の雰囲気から目覚めさせるように、小気味良く始まる。弦と木管の細かい動きが切迫感を持って流れ、幾小節にもまたがる長大なクレッシェンドが何か不気味なものが迫ってくる印象を与える。舞曲風の動機も織り込まれるが、無窮動のような伴奏の嵐の前にかすれ気味だ。クライマックスでは1本のトロンボーンが威圧的に咆える。悲鳴を上げるような木管の音も加わり、まるで「Dies irae（怒りの日）」の音楽のようだ。ベートーベンの解説でも述べたように、トロンボーンという楽器は、神や悪魔など人智を超えた存在を象徴する楽器である。ここでのトロンボーンは、慈愛に満ちた神というよりは、人々を罰する恐ろしい存在を象徴しているようだ。あるいは、信仰心が薄く、宗教作品の少なさにロシア皇帝までも嘆かせたといわれるチャイコフスキーにとって、人智を超えた存在は神ではなく悪魔だったのかもしれない。さらにうがった見方をすると、ロシア音楽の後輩ともいべきショスタコーヴィチは、ひどく不格好だがその不格好さが素晴らしく魅力的な独特のトロンボーン・ソロを交響曲に書いているが（4番がその典型）、その源流がこのチャイコフスキー3番にあるのではないか、という気さえする。中間部の主題（譜例11）は、勇ましくもどこかユーモラスだ。悪魔の哄笑といったところか。

**第5楽章：**「ポーランド風舞曲のテンポで」と指定された3拍子のフィナーレ。この指定のため、交響曲第3番自体が『ポーランド』の愛称で呼ばれることもある。舞曲と言っても華麗なものではなく、特に第1主題は大地を踏みしめるような力強さに満ちている。第2主題（譜例12）は讃歌風の壮麗な旋律が木管楽器によって歌われるが、弦楽器の伴奏音型が敢えて細切れな形に書かれており、いま一つ流れに乗りきれないもどかしさを感じさせる。後半、これらの主題が再現される様が圧巻だ。まず第1主題はフーガになって再現される。フーガとは、特定の旋律が少しずつ遅れながら繰り返される作曲技法であり、あらゆる音が綿密に絡み合った、隙のない極めて荘厳な音楽である。フーガはあらゆる作曲技法の中でも最も崇高なものであり、フーガを伴う交響曲は決して多くはない。この曲は、舞曲風に提示された旋律でフーガを書いた、大変に野心的な交響曲というべきだろう。そしてフーガが収束すると、テンポをぐっと落とし、讃歌風の第2主題を堂々たる遅いテンポで、金管楽器も加わった壮麗な響きで歌い上げる。提示部では細切れな動きをしていた弦楽器の伴奏が、ここでは途切れることのない巨大なうねりとなって管楽器の讃歌を盛り上げる。最後は急激にテンポを上げ、熱狂的な興奮の中で終わる。

# 京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様  
杉本 幸子様  
遠藤 時金様  
井谷 宏美様  
鎗本 和弘様  
谷口 佳隆様  
信広 澄子様  
吉田 育弘様  
吉田 寛子様

木下 清美様  
西坂 壽美子様  
小松 朋美様  
鈴木 一俊様  
辻 良治様  
西 英子様  
浅野 節子様  
福田 稔様  
金谷 一紀様

岡 喜久彦様  
山本 均様  
古川 宏様  
竹野 繁也様  
市川 寛様  
出村 勝正様  
河内 尚和様  
坂口 尚史様

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)

## ♡「友の会」会員随時募集中♡

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

- 【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間  
【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待  
2. その他演奏活動のご案内  
3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ

Tel&Fax : 075-605-0123 (西村)

E-mail : tomo@kyotophilos.com

## ♡第30回定期演奏会のお知らせ♡

2011年12月23日(金・祝)

午後2時開演

京都府長岡京記念文化会館

♡曲目♡

安部幸明/交響曲第1番

マスネ/組曲『絵のような風景』

ラロ/交響曲ト短調

(予定)

※詳細が決まりましたらホームページ等にてご案内いたします

# 京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

<b>Violine</b>	<b>Bratsche</b>	<b>Flöte</b>	<b>Horn</b>	<b>顧問</b>
芦原 靖子 (Konzertmeisterin)	塩井 淑野	石川 樹子 (Pikkoloflöte)	芦原 俊平	和田 之宏
小幡 拓也	乙竹 泰・	江藤 佳美 (Pikkoloflöte)	片山 真吾	<b>団長</b>
西谷 真彦	河井 奈美・	海堀 梓	草木 美佐子	長岡 武志
光井 麻優香	高原 友洋・	松岡 良治	黒田 直樹 JAMES	<b>事務</b>
村中 三喜保	森園 博章・	<b>Oboe</b>	坂口 裕志	西村 浩 (事務局長)
山口 陽平	上田 秀樹※	栗山 才子	長岡 武志	邑橋 明子
飯田 俊也・	丸山 圭一※	坂田 翔太郎	増田 亜由美	
木村 誠志・	吉川 昌毅※	<b>Klarinette</b>	<b>Trompete</b>	
内藤 佐紀・	<b>Violoncello</b>	安達 真未	遠藤 啓輔	
西邨 奈穂・	小林 豪	関 英子	作山 智	
西村 祐司・	多田 進	南井 菜穂子	竹内 恵理	・ : 団友
横川 隆太・	岡崎 有紗・	<b>Fagott</b>	中西 美智子	※ : 客演奏者
吉川 正剛・	小野 健太郎・	石塚 有里子	<b>Posaune</b>	
渡辺 達之輔・	鈴木 弦太郎・	桃川 大毅※	藤井 舞	
井村 有里※	塚田 毅・		馬瀬 英明	
池田 純子※	津田 博隆・		宮下 秀行	
上田 晶子※	西山 峻司・		<b>Tuba</b>	
野原 菜帆※	秦野 貴生・		佐藤 義彦※	
益子 一※	<b>Kontrabaß</b>		<b>Pauken</b>	
安江 絵美子※	茂原 尚樹		徳田 浩樹・	
	田中 郁太郎			
	鳥山 拓			
	中平 明江			
	藤井 輝之			
	丸山 拓史・			

弦トレーナー 岩井 英樹 大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者  
 弦トレーナー 松村 洋介 大阪フィルハーモニー交響楽団コントラバス奏者  
 管トレーナー 山崎 雅夫 トランペット奏者 京都大学交響楽団金管トレーナー

## 新入団員随時募集中

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

### <募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ (弦楽器急募！！)

オーボエ・ファゴット・打楽器 ※管楽器・打楽器はオーディションを行っております

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費：3,000円/月 合宿費：15,000円程度 演奏会参加費：20,000～30,000円

(学生は活動費1,000円/月、演奏会参加費10,000円)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilos.com](mailto:recruit@kyotophilos.com)

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.kyotophilos.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。